

ろう重複障害者の居場所づくり支援をめぐる現状と課題

甲斐更紗・二神麗子・吉村京子
木村素子・金澤貴之

群馬大学教育実践研究 別刷
第38号 267～276頁 2021

群馬大学共同教育学部 附属教育実践センター

ろう重複障害者の居場所づくり支援をめぐる現状と課題

甲斐更紗¹⁾・二神麗子¹⁾・吉村京子²⁾
木村素子³⁾・金澤貴之³⁾

1) 群馬大学共同教育学部特別支援教育講座（日本財団事業）

2) (前) 社会福祉法人ゆずりは会

3) 群馬大学共同教育学部特別支援教育講座

Current Status and Issues of Support for Creating a Variety of Places for the Deaf Persons with Multiple Disabilities

Sarasa KAI¹⁾, Reiko FUTAGAMI¹⁾, Kyoko YOSHIMURA²⁾
Motoko KIMURA³⁾, Takayuki KANAZAWA³⁾

1) Department of Special Needs Education, Cooperative Faculty of Education, Gunma University

(The Nippon Foundation Project)

2) Social Welfare Juridical Person Yuzurihakai (previous workplace)

3) Department of Special Needs Education, Cooperative Faculty of Education, Gunma University

キーワード：ろう重複児・者、家族、居場所づくり

Keywords : Deaf Persons with Multiple Disabilities, Their Families, Creating a place for oneself

(2020年10月30日受理)

1 はじめに

1.1 ろう重複障害とはどんな障害なのか

一般的に、重複障害は身体障害（視覚障害、聴覚障害、肢体不自由、内部障害など）、知的障害、精神障害のうち、二つ以上を有する場合をいう（永淵，2000）。障害の組み合わせはいくつもあり、個別性も高く、一概に語るのが難しい現状がある。重複障害について明確に定義されているものは少なく、重複障害というものが一貫した条件のもので統一された概念として示されているのではなく（赤畑，2014）、法律、制度、サービス体系によって異なる（中野，2008；相磯，2006）といわれている。

聴覚障害の他に知的障害や視覚障害、肢体不自由、精神障害などを併せ有する状態を総称しての「ろう重

複障害（以下、ろう重複とする）」においても、明確な基準や概念があるわけではない。主障害に他の障害が重なったという原因結果の因果関係的な見方のみならず、二つ以上の障害が重なることで新たな障害が発生するという、関連する複合的要因の交互作用から生じるという見方（赤畑，2014）があるとされている。

さらに、ろう重複児・者の場合、音声言語のみならず手話でのコミュニケーションも限定されている場合が多く、独自の身振りやサインを使用するなど、コミュニケーション方法も一人ひとり全く異なっている。

1.2 ろう重複児・者が抱える固有の問題

手話によるコミュニケーション環境が十分に保障されているかどうかによって、その障害の程度が大きく

左右する結果になるという点がろう重複児・者の固有の問題としてあげられる。例えば、中野（2003）は知的障害の養護学校にて、知的障害を併せ有するろう重複児の発達支援を実施した結果として、ろう重複児にとっての十分なコミュニケーション環境が保障されていないため、教員から何らかの指示があることはある程度分かるが、自分から何か気持ちをもって伝えることが難しいといったことがみられ、本来ならば十分に育つはずの言語的・情動的な発達が阻害されている可能性を指摘した。また、知的障害を併せ持っていることで、知的障害養護学校を選択した結果として、「おはよう」「ありがとう」「はじめます」などの1つ1つの身振りが教員により不統一なものとなってしまう、十分な言語発達が促進されず、当の認知発達に大きな支障が生じてしまうという現象がしばしばみられる（金澤，2008）。

似たようなことは教育現場のみならず、就労の場でも起きている。そのため、ろう重複児が学校での教育段階を終えて社会に出た後、手話などによるコミュニケーションで就労などの様々な経験が共有できる場が必要ということで、ろう重複児・者のための事業所などが設立された。2019年6月時点では全国に59箇所ある（全国ろう重複障害者施設連絡協議会，2019）。しかし、ろう重複児・者支援に特化された事業所などが設置されている自治体は限られており、設置自治体であっても遠方であれば通所ができないため、知的障害者が多く利用する事業所などを利用している場合がほとんどである。それが、ろう重複児・者の居場所づくりを困難にさせている要因の1つであるが、物理的な背景のみならず、居場所づくりを困難にさせている要因は明らかになっていない。また、ろう重複児・者の家族は親亡き後のろう重複児・者の生活などに不安を抱え、家族が集まって親の会（または家族会）を立ち上げ、聴覚障害特別支援学校（以下、ろう学校）や聴覚障害者関係団体とともに、ろう重複児・者に対応した事業所や施設などを設立する傾向が高い。ろう重複児・者に対応した事業所などがあることによって、ろう重複児・者が集まることでコミュニケーション環境が保障され、ろう重複児・者が手話でコミュニケーションを図ることができることの重要性をろう重複児・者の家族が認識している例がある。しかし、親の会などの団体が設立されていても、ろう重複児・者

の居場所づくりに発展しない例もいくつかみられている。

そこで、以上の問題意識に立脚し、本稿の「3 ろう重複児・者の家族が抱える問題」では、ろう重複児・者の家族が抱える問題について、厚生労働省平成30年度障害者福祉総合支援事業「聴覚障害と他の障害を併せ持つためにコミュニケーションに困難を抱える障害児・者に対する支援の質の向上のための検討」（以下、厚労省推進事業）として実施された、ろう重複児・者の家族への多角的な調査にて得られた事例を踏まえて、居場所づくりへの発展につながる要素を見出すという視点で整理するとともに、ろう重複児・者の居場所づくりに必要な要素について検討する。

続いて、「4 なかま企画¹⁾実施を通しての居場所づくり」では、ろう重複児・者の居場所づくりに向けての手立てについて述べる。本稿では特に、なかま企画の事例に焦点をあてて、先行研究を踏まえて居場所づくりの充実を図るための手立てについて検討する。

2 目的

ろう重複児・者や家族が抱えている固有の問題を整理した上で、ろう重複児・者の居場所づくりの実現に必要な要素を明らかにし、居場所づくりの充実を図るための手立てについて検討することとする。

3 ろう重複児・者の家族が抱える問題

3.1 コミュニケーションと選択肢の少なさ

厚労省推進事業（群馬大学，2019）として実施された、ろう重複児・者の家族へのグループ半構造化インタビューまたは個別半構造化インタビュー調査にて得られた事例を、プライバシーなどの個人特定ができない形で、居場所づくりの発展につながる要素を見出す視点で、類似する内容をまとめてカテゴリー化するという分析を行なった。なお、調査の対象者は、ろう重複者の親の会2団体の会員（ろう重複者の親9名）であった。倫理的配慮にあたって、研究の目的・方法、個人情報保護について文書と口頭で説明し、同意を得た。

結果として、5の大カテゴリー、14の小カテゴリーが生成され、表1のように整理された。大カテゴリー

表1 インタビュー内容のまとめ（群馬大学（2019）の分類をもとに筆者らが再構成）

大カテゴリー名	小カテゴリー名	インタビュー内容の一例
〈ろう重複児・者団体(親の会)に関わるようになったきっかけ〉	【親の会との出会いによる世界の拡がり】	・ろう学校見学の時にろう重複児クラスの母親からろう重複者の親の会のことを知り、親の会行事への参加など誘われたことをきっかけに、「こういう世界があるんだ」とろう重複児者やそれに関わる人たちの世界があることに気づいた。
	【ろう学校内での繋がり】	・ろう学校保護者控え室で(子どもの年齢ごとに応じた)教材を作っているうちに、ろう重複児の親は自然に集まるようになった。
〈ろう重複児の就学先の選択における問題〉	【未就学段階にて選択ができない状況】	・ろう学校から養護学校を勧められた。 ・ろう学校見学にて、ろう重複児の受け入れに消極的な感じを受け、養護学校を選んだ。
	【養護学校における手厚い指導】	・当時の養護学校は児童3人に先生は二人という環境。養護学校の方が聴覚障害との重複ではないが重複の子が多かったため、いろいろな刺激があると思った。
	【高等部段階での選択状況】	・手話が必要では、と思うようになって、養護学校、ろう学校、どちらかを選ぶことになった。 ・(養護学校に通いながら)小学部の途中からろう学校教育相談を利用して、他のろう重複生徒がろう学校高等部に入るのをみて、ろう学校高等部進学を選んだ。
〈親が捉えているコミュニケーションの実態〉	【手話がある環境でのコミュニケーションの変化】	・ろう学校寄宿舎生活を通して、周りの生徒たちの様子をみてコミュニケーションするようになった。
	【写真や絵などを活用したコミュニケーション】	・(通所している事業所などは)一日の予定を写真や絵などを使って説明してくれている。
	【家族でのやり取りを汲んだ上でのコミュニケーション対応】	・普段家庭で使う、子どもと親しか通じない手話や身振りなどを(事業所の職員たちに)伝えると、その中から選んで使ってくれている。
	【サービス利用面談における手話通訳利用】	・面談の時は、手話通訳をお願いしている。工賃内容などについて頑張って話し合っていた。
	【手話がない環境でのコミュニケーション停滞】	・高校卒業した後は、知的障害者の施設に通っていて、最初担当者の人は、手話をこういうふうに使ってコミュニケーションする、手話といってもジェスチャーとか色々なサインがあって、コミュニケーションしてまずって言っているが、なかなか次に繋がらない。
	【地域の福祉サービス事業所の中へのろう重複者支援の組み込み】	・地域の知的障害者施設の中に、ろう重複者支援にあたる部門を作ってもらって、そこに地域の垣根を越えて通えるようにしてもらうのが一番いいのでは。(また)ろう重複者に対する支援というのが、手話を中心に行われるのであれば、手話を理解し習得している利用者さんに利用してもらうのが一番向いているのでは。
〈ろう重複者支援のニーズ〉	【ろう者コミュニティ関連のイベント参加】	・親の会もろう者関連大会に参加したいが、成人のろう重複者へのサポートがない。ろう重複児・者が楽しめる内容であればいいけど、じっとしていなければならない内容やその時間帯ではボランティアが付き添ってほしい。ろう重複児・者(の世話)が大変だからその親も参加できないというのはおかしい。
	【移動支援】	・外出するときに手話のできるヘルパーさんがいるといい。 ・同じ性別の支援者がいるといい。
	【支援者変更の可能性】	・いつでも支援者をチェンジしてもらえる。
〈ろう教育への思い〉		・手話を習える、学べるということは、ろう学校。もっとうろう重複児が通いやすい学校になってくれれば、と。

名を〈 〉、小カテゴリー名を【 】で表している。小カテゴリーでのインタビュー内容については、親が話した発言内容をまとめたものをいくつか例として提示した。

(1) 〈ろう重複児・者団体（親の会）に関わるようになったきっかけ〉の内容

表1でみられるように、【親の会との出会いによる世界の拡がり】にて、ろう学校見学の時にろう重複児クラスの母親から親の会行事への参加などに誘われたことをきっかけに、ろう重複児・者家族会の会議に参加し、ろう重複児・者やそれに関わる人たちの世界があることに気づいたという例がある。また、ろう学校での保護者控え室に親が集まり、子どもの年齢ごとに応じた教材づくりをしている中で、自然にろう重複児の親が集まるといった、【ろう学校内での繋がり】を通しての連帯感が出来上がってきたという例もみられた。

このことから、同じ立場にある親たちが出会うことで、同じ立場の親たちの居場所、ろう重複児・者の居場所が少しずつ形成されていくことの意味が大きいことが窺えた。

(2) 〈ろう重複児の就学先の選択における問題〉の内容

【未就学段階にて選択ができない状況】、【養護学校²⁾における手厚い指導】、【高等部段階での選択状況】の小カテゴリーが生成された。それぞれの小カテゴリーにおける例は表1の通りであった。ろう学校にて集団コミュニケーションが少しずつ形成され、ろう学校幼稚部3年間で形成された人間関係（子ども同士の関係、親同士の関係など）もあり、ろう学校進学を希望したにかかわらず、ろう学校幼稚部から小学部に上がる時に、ろう学校から養護学校の方がいいのではないかというふうに勧められた、という例がみられた。また、ろう学校を見学した際にろう重複児の受け入れに消極的な感じを受け、養護学校を選んだという例もみられた。各県にろう学校は1校しかないという状況もあり、「選択肢がない、選ばざるをえない」という【未就学段階にて選択ができない状況】に、ろう重複児・者の親が置かれたことが窺えた。その一方、聞こえについての指導はろう学校の方が手厚いと感じながらも、教員の数などの事情で聴覚以外の障害に対

する【養護学校における手厚い指導】によって様々な刺激が受けられることを優先して養護学校を選択したという例もみられた。聞こえについての指導、聴覚以外の障害に対する指導についてどちらかを選択するという状況であったことが窺えた。そして、高等部になると、手話環境を求めてろう学校高等部進学を選択するといった【高等部段階での選択状況】があったことが窺えた。また、（養護学校に通いながら）小学部の途中からろう学校教育相談を定期的に利用していたことと、他のろう重複生徒がろう学校高等部に入学したのをみて「うちの子も受け入れてもらえるかな」ということがあって、ろう学校高等部進学を選んだという例もみられた。しかし、選択肢が極端に少ない、もしくは選択肢がない状況で、十分に選択ができなかったと親が捉えている面があることも否定できないといえる。ろう重複児または親が望む複合的なニーズに合った学校選択が十分にできない状況があることが窺えた。

(3) 〈親が捉えているコミュニケーションの実態〉の内容

ろう学校寄宿舎で生活を送るようになってから、周囲の生徒たちの様子を見てコミュニケーションをとるなど、手話で話が通じるようになったという【手話がある環境でのコミュニケーションの変化】といったコミュニケーションの例がみられた。

また、知的障害者などの事業所・施設などに通所しているろう重複者の事業所内のコミュニケーション状況では、写真や絵などの画像媒体を活用して一日のスケジュールを説明するなどのコミュニケーションを図るという【写真や絵などを活用したコミュニケーション】の例がみられた。また、【家族でのやり取りを汲んだ上でのコミュニケーション対応】にみられるように、家庭の中で使われている手話や身振りを事業所・施設などでも共有していることが窺える。ただ、簡単な内容の伝達や指示的なやり取りであることが推察された。支援を展開させていくにあたって、やり取りの表面的なところを見るのみならず、同じ内容でも言い方を工夫するなど家族とともに追求していく必要性が窺えた。

そして、知的障害者または精神障害者が利用している事業所への通所にて、福祉サービス利用内容につい

での面談の時は、手話通訳を利用し、工賃内容などについて頑張って話し合っていたという例の【サービス利用面談における手話通訳利用】がみられた。それらの4つの小カテゴリー内容は、ろう重複者に応じたコミュニケーション環境の整備またはコミュニケーション支援を行なった結果であることが窺えた。その一方で、ろう学校を卒業した後に通所した知的障害者の事業所・施設などでは、支援担当者との間にジェスチャーなどの色々なサインを使ってコミュニケーションをとるという状況があったが、なかなかコミュニケーションが次々と拡がらない（繋がらない）、というような【手話がない環境でのコミュニケーション停滞】の例がみられた。

（4）〈ろう重複者支援のニーズ〉の内容

〈ろう重複者支援のニーズ〉では、【地域の福祉サービス事業所の中へのろう重複障害者支援の組み込み】、【ろう者コミュニティ関連のイベント参加】、【移動支援】、【支援者変更の可能性】の小カテゴリーが生成された。近年の障害者施策は大規模な入所施設から、グループホームなどの小規模な事業所の充実に向を転換している。そのため、ろう重複児・者に特化した事業所・施設などを新規に設立するのが難しい時期に、親の会が単独で事業所などを設立するのは難しいため、知的障害者の事業所などにろう重複者支援にあたる部門を設けて、地域の垣根を超えて通所するのがいいのではないかという【地域の福祉サービス事業所の中へのろう重複者支援の組み込み】の例がみられた。また、「ろう重複児・者の親もろう者関連大会に参加したいが、ろう重複児・者が楽しめる内容であればいいけど、じっとしていなければならない内容やその時間帯では（ろう重複児・者に）ボランティアが付き添ってほしい」というような例の【ろう者コミュニティ関連のイベント参加】がみられた。【移動支援】では、外出するときに手話のできるヘルパーさんがいるといい、同じ性別の支援者がいるといい、という例がみられた。【支援者変更の可能性】では、自分のニーズに合わない支援者が来られた場合は、変更を申し出る可能性があるという例であった。福祉サービス利用においては、自身のニーズなどにあった支援者などを決めることができるという面があるが、学校現場においては一度決まった学級の主任は変わらないと

いう都合上、親としては1年間我慢をしなければならないという気持ちを抱えなければならないことが窺えた。

（5）〈ろう教育への思い〉の内容

〈ろう教育への思い〉では、ろう重複児が手話を習得できるのはろう学校なので、ろう重複児が通いやすい学校になってくれれば、という例がみられた。長年にわたる聴覚障害教育での主な教育方法は「聴覚口話法」であり、残存聴力を有する聴覚障害児にとってはある程度の教育成果がみられた。その一方で「聴覚口話法」の成果があがりにくい面を持つ聴覚障害児の存在もみられている。そのような彼らの中にろう重複児も含まれているため、ろう学校が教育方法も含めてろう重複児が通いやすい環境に変わってくれば、という思いがあることが窺えた。

3.2 ろう重複児・者のイベントなどの参加

前項での内容を踏まえた上で、ろう重複児・者の居場所づくりの発展に関する要素の1つである、「3.1 コミュニケーションと選択肢の少なさ」の【ろう者コミュニティ関連のイベント参加】を取りあげる。イベント参加は子どもや家族、そして社会をつなぐ、そして、ろう重複者の居場所を拡げるという役割がある。甲斐ら（2021）によると、イベントなどの参加において135名のうち約75%のろう重複児・者が「家族同伴」「同行援護・移動支援などのサービスを活用して参加」「単独で参加」の方法でイベントなどに参加していることが分かっている。その一方で、イベントに参加していないろう重複児・者もみられ、参加しない（または以前は参加していたが今は参加していない）理由は主に「家族の体力的負担（高齢化など）」「興味ない」「内容がわからない、（ろう重複児・者にとって）できる内容がない」であった。「3.1 コミュニケーションと選択肢の少なさ」の【ろう者コミュニティ関連のイベント参加】にみられるように、「親の会もろう者関連大会に参加したいが、成人のろう重複者へのサポートがない。ろう重複児・者が楽しめる内容であればいいけど、じっとしていなければならない内容やその時間帯ではボランティアが付き添ってほしい。ろう重複児・者（の世話）が大変だからその親も参加できないというのはおかしい」ということがろう重複児・者の親にはある。このことから、ろう

重複児・者の親は、常に「(親自身も) イベントに参加したいけど、(ろう重複児・者である) 我が子をどうするか」がついてまわる(群馬大学, 2019; 二神, 2020など)ことが窺えた。ろう重複児・者の親に配慮がされていない、また、ろう重複児・者が分かる内容やコミュニケーションの発展を考慮した内容のイベントなどの余暇活動が実施されていないことも、ろう重複児・者のイベントなどへの参加、そしてろう重複児・者の居場所やろう重複児・者のコミュニケーションの発展を妨げる要因になっていることが窺えた。そして、もう一つ、ろう者コミュニティに「聴覚に障害があれば、他の障害があろうとなかろうと、同じ仲間」という意識がみられないことをろう重複児・者の家族は指摘したいことが窺えた。

また、甲斐ら(2021)は、イベントなどに参加していないろう重複者のコミュニケーションについて、「家庭」における「自分がその場にある欲しいものについて指差して伝える状況」では、「身振り」の使用がイベントに参加しているろう重複者より多いことを指摘している。このことは、「家庭」の中で欲しいものを伝えるという状況が身振りというコミュニケーション手段の使用に限定されているため、家庭以外の場にコミュニケーションが拡がらないことを示唆している。そして、ろう重複児・者のコミュニケーション状況を拡げるためには、ろう重複児・者にあったイベントなどの余暇活動の実施が求められるのではないだろうか。

4 なかま企画実施を通しての居場所づくり

「3 ろう重複児・者の家族が抱える問題」にて挙げられた問題意識に立脚し、イベントなどの余暇活動の実施によってろう重複児・者の居場所づくりを試みるとともに、イベントなどの活動実施によってコミュニケーション状況を拡げるという視点に基づいて、2019年度からA大学では、A地区ろう重複者をもつ親の会の協力のもとに、なかま企画を実施した。なかま企画の内容は表2の通りであった。

4.1 なかま企画実施におけるろう重複者とのかわり

表2に示しているなかま企画では、A大学にて実施

している、手話・手話通訳技術習得のためのプログラムを受講している学生ら(以下、支援学生)がなかま企画の運営及びなかまへの支援担当としてあたった。支援学生はなかま企画に参加したろう重複者とペアを組み、手話などによるコミュニケーションを図りながら、時には通訳的なこともしながら、協働的なかわり行動でろう重複者とかわっていた。エピソードの1例を図1に示す。手話・指さし・指文字等は{ }で、ろう重複者や支援学生の行動は[]で表記した。なお、プライバシー保護のため、個人が特定されないよう留意し、本質を損なわない範囲でエピソードを示すこととした。

表2 2019年度なかま企画実施

回	日にち	内容	参加者	
			なかま	支援学生
1	6/2	・ポッチャゲーム	5	11
2	8/3	・ポッチャゲーム	5	8
3	8/4	・エコバック作り	5	5
4	11/9	・クリスマスリース作り ・ポッチャゲーム	8	12
5	2/15	・創作活動 ・ゲーム(季節にちなんだ内容)	3	17
6	2/16	・個別対応	1	3

注) ポッチャは、一般社団法人日本ポッチャ協会 (<https://japan-boccia.com/about>) によると、重度身体障害者のために考案されたスポーツで、パラリンピックの正式種目である。ジャックボール(目標球)と呼ばれる白いボールに、赤・青のそれぞれ6球ずつのカラーボールを投げたり、転がしたり、他のボールに当てたりして、いかに近づけるかを競うとされている。

(場面) 装飾用の輪(紙皿)に毛糸を巻く作業にて、一人のろう重複者(Bさん)が毛糸を巻いていくことに飽きたようであった。

Bさん(ろう重複者): [一人で毛糸を巻いていたが、だんだんやる気をなくしているようで、巻くスピードが落ちている]

Cさん(支援学生): [装飾用の輪を持ち続けている。]

Bさん: [毛糸の玉をテーブルの上に置く][しばらく間がある]

Cさん: [しばらくして][飽きた?]

Bさん: [反応しない]

Cさん: [片手で装飾用の輪を持ち、もう片手で輪の真ん中に毛糸の玉を軽く投げて、輪の真ん中の向こう側に落ちた毛糸の玉を拾う、という行動を繰り返す]

Bさん：[Cさんと毛糸の玉をちらっと見る]
 [毛糸の玉を持って、Cさんに向かって装飾用の輪の真ん中に軽く投げる]
 [毛糸の玉が輪の真ん中を通ってCさんの前に落ちる]

Cさん：[受けとめる]
 [毛糸の玉を渡すように装飾用の輪の上側に軽く投げる。毛糸の玉はBさんの前に落ちる]…①

Bさん：[Cさんに向かって装飾用の輪の真ん中に軽く投げる]…②
 [以降、①と②の行動が繰り返される。Bさん、Cさんが一緒に毛糸を巻いているような作業になる]

図1 なかま企画実施におけるエピソードの1例

実際のかかわり場面では、場や状況を把握しながらコミュニケーションの見立てを行ない、行動を見せながら、相手とのかかわりを形成させていた。情報を伝達するのみならず、行動を見せることを意識した視覚的コミュニケーションが重要であることが窺えた。行動を見せることを意識した視覚的コミュニケーションにおいては、相手とじっくりとかかわりながら支援の基盤を築く「持続的かかわり」と、瞬時にタイミングを見ながら動いていく「即時のかかわり」という2つの要素(赤畑, 2014)がある。なかま企画は2時間から1日にわたって行われるため、「即時のかかわり」として、状況に応じて「今、ここで」という対応を行うことや、視覚的に行動で伝えるというコミュニケーションが求められることが窺えた。図1に示されたエピソードでは、最初は支援学生が装飾用の輪を持っていて、ろう重複者がそれに一人で毛糸を巻くという様子がみられていた。支援学生がろう重複者の行動を言語化して表出する(手話で表出する)作業を行うことによって、最終的には二人で毛糸の玉を投げ合うみたいと一緒に毛糸を装飾用の輪に巻くという協働的な行動に変わっていった。ろう重複者と支援学生双方が「今、ここで」感じていることを行動で伝え合いながら、互いのリアリティを共有するプロセス(岩本, 2002)が、図1のエピソードの中にあっただのではないだろうか。

甲斐ら(2021)によると、「家庭」における、ろう重複者からの発信コミュニケーション手段では「手話」「身振り」の使用の割合が高い。その背景とし

て、家族はろう重複児・者と幼少の時から生活経験をともししているため、文脈を推測してろう重複児・者が表出している独自の手話や身振りの意味を解釈することによって、発信コミュニケーションを受けとめているため、ろう重複者は発信できることが窺える。また、生活経験などをともしすることで相手が発信している内容の文脈を推測して解釈していくことは、相手とじっくりとかかわりながら支援の基盤を築く「持続的かかわり」の一つでもあることが窺える。しかし、そのようなかかわりを短時間で行われる「なかま企画」実施の中で展開させるのは困難である。その一方で、「友達」「ろう者コミュニティ」はろう者や手話に長けている手話話者で構成されているため、身振りで発信しても、周りの話を理解したり受けとめたりする受信コミュニケーションは「手話」の方が有利であるため、「友達」「ろう者コミュニティ」の中でのろう重複者の受信コミュニケーション手段は手話の使用が多い傾向がみられている。行動を見せることを意識した視覚的コミュニケーションの「即時のかかわり」をするとともに、ろう重複者が受信できるように、行動の意味を言語化して表出(手話表出)するようなかかわりが支援者側に求められることが窺えた。

4.2 ろう重複者の親自身の活動の幅を広げる機会の確保

表2に示している、第2回目、3回目に実施されたなかま企画は、全国規模のろう教育に関する集会(主催は聴覚障害者団体)が開催されたことに伴って、ろう教育に関する集会では初めての試みとなる「なかま企画」として実施された。なかま企画があったことによって、ろう重複者の家族は我が子であるろう重複者をなかま企画に参加させ、自身は登壇者としてろう重複の自分たちの子どものことについて発表することが可能になった。それらによって、親自身の活動の幅が広がったことが窺えた。

そして、第4回目では、A地区ろう重複者親の会の創立記念大会が開催され、親の会は自身で企画・運営をし、大会を成功させることができたが、その背景には、「なかま企画」があったからこそ、子どもを預けて、安心して親たちが大会の運営をすることができたというのがある。これらはろう重複児・者の居場所づくり実践を通じた家族へのサポートの1つになること

が窺えた。これはA地区ろう重複者親の会がかかわっているろう者コミュニティに「聴覚に障害があれば、他の障害があろうとなかろうと、同じ仲間」という意識がみられたことが、なかま企画の実施につながったということが窺えよう。

「4.1 なかま企画実施におけるろう重複者とのかわり」、「4.2 ろう重複者の親自身の活動の幅を拡げる機会の確保」が、ろう重複児・者の居場所づくりの充実を図るための手立てである。

5 まとめと今後の課題

ろう重複児・者や家族が抱えている固有の問題を整理した上で、ろう重複児・者の居場所づくりの実現に必要な要素を明らかにし、居場所づくりの充実を図るための手立てについて検討した。本稿では、以下の2点について考察する。

5.1 選択肢の少なさの中におけるろう重複者の居場所づくり

ろう重複児・者の親は我が子の成長途上で、ろう学校幼稚部をはじめ学校生活で出会う先生方から、また医療・福祉機関においてその都度異なる方針を示されたりすることが多い(村瀬, 2005)。本稿では、ろう学校幼稚部から小学部に上がる時点で、なんとなく進路を変えられるような方向に持っていかれたり、就学先の選択肢がない状況に置かれたりといった状況がみられた。また、就学先の選択の問題のみならず、学校での教育段階を終えて就労するなどの様々なライフステージにて、親は選択肢がないと模索し、葛藤することを繰り返している。就労においては、ろう重複者に特化した事業所・施設などは全国に59箇所しかない状況のため、居住地の付近にある、知的障害者などが利用するなど、ろう重複者対応を専門としない事業所などに通わせる選択をせざるを得ない状況に置かれる。さらに、手話コミュニケーションのニーズへの対応と、移動介助や身辺介助、作業内容の配慮などにみられるような他の障害の特性へ対応、どちらも重要であるが、両方とも実施している事業所・施設などが限られている中で、どちらも選べない中での選択をせざるを得ないろう重複児・者の親がほとんどである。

1980年頃からろう重複児・者の集団生活を保障する

ために、共同作業所や施設づくりがろうあ運動との連携のもとに進められてきた(細野, 1998)。このようにろう重複者の居場所づくりはろう重複者の家族のみならず、聴覚障害者関連団体や教育・福祉行政が「ろう重複者もろう者コミュニティの一員」という意識のもとに居場所づくりを進めた面と、高齢ろうあ者や何らかの理由で社会不適応を起こし在宅生活を余儀なくされたろう者の問題など、ろう者にとって身近な課題意識が前提にあったため、それがきっかけとなって聴覚障害者関連団体がろう者の居場所づくりを始め、それがろう重複者の事業所・施設などの設立につながっていった面がある(二神, 2019)。

そのような中、居場所は必ずしも事業所・施設などの物理的場所を意味するのではなく、ろう重複児・者や、彼らの家族が集まるだけでも「居場所」になりうるのではないだろうか。北山(1993)は、居場所について自分が自分であるための環境であり、物理的な場が用意されているだけでは不十分であり、本人が「ここは自分の領分である」と感じられて初めてその場が居場所となりうると述べている。本稿の「4 なかま企画実施を通しての居場所づくり」にて述べた、ろう者コミュニティに「聴覚に障害があれば、他の障害があろうとなかろうと、同じ仲間」という意識がみられたことが、今回のなかま企画という居場所づくり実践につながっていったことが考えられる。なかま企画という、ろう重複者が主体的に参加し、コミュニケーションの幅を広げていくようなイベント活動が、ろう重複者にとって「自分が自分でいられる環境」であったかどうかは今回の実践からは明らかになっていない。しかし、図1のエピソードにみられるように、ろう重複者と支援学生双方が「今、ここで」感じていることを行動で伝え合いながら、互いのリアリティを共有することを重ねていくことで、「自分が自分でいられる」居場所が変わっていく可能性が考えられる。そういう意味では、なかま企画の実施はろう重複者の居場所づくりの1つでもあり、親や家族にとっての、ろう重複児・者支援を考えるときの数少ない選択肢の1つにもなると考えられよう。

5.2 居場所づくりを通じた家族へのサポート

親が我が子であるろう重複児・者とかかわるにあたっての支援において、永石(2007)は1人で疲弊す

る事態を避けるためには、社会的なサポートを含めたより広い視野で支援を捉えなければならないと述べている。そのような支援の1つとして、障害児(者)を持つ親が、一時的に一定の期間、障害児の親から解放することにより日頃の心身の疲れを回復し、ほっと一息つけるようにする援助として、レスパイト・サービスがある(廣瀬, 1993)。そのようなサービス利用とまではいかないが、親が子と離れることで親も新たな時間や機会を得る(中根, 2006)ことは重要である。そのような意味から考えると、ろう重複者の親が子どもをなかま企画などの余暇活動に参加させる間に、ろう重複者の親自身も学習の機会を得たり、ろう者コミュニティの活動に参加したりなど活動の幅を広げたりすることは、親にとっての休息になりうるかもしれない。ろう重複児・者の居場所づくりの1つである「なかま企画」実施は、家族へのサポートにもなっていることが考えられよう。

5.3 今後の課題

以上の考察を総合し、今後の課題として、以下の2点が指摘できる。

第一になかま企画などの継続的な実施及び定着である。なかま企画などの参加はろう重複児・者や彼らの家族の余暇活動でもあり、余暇活動は彼らと社会をつなぐものになる。ろう重複児・者や家族が参加できる余暇活動づくりを行うことで、彼らのコミュニケーション環境を保障することが今後の課題であろう。

第二にろう重複者の居場所づくりを担う支援者育成である。なかま企画にかかわった支援者(今回は支援学生である)の手話コミュニケーションスキル及びコミュニケーション支援スキル向上を図ることが求められる。同じ時間を共有し、背景となる文脈を共有することで、断片的に受け止めた内容をもとに言いたいことを類推することができる力はろう重複児・者支援においては欠かせないものであるが、短時間という枠内で、ろう重複児・者が発する行動などの表出の方法や受信コミュニケーションの状況や程度などを分析し、可視化・言語化して相手と共有化する支援スキルが求められるのではないだろうか。また、場の安全が守られて初めて、ゆったりとその場で過ごしたり、自由な表現活動が促されたりされる(石倉, 2003)が、瞬間的ななかまわりの中で場の安全確保ができる支援スキル

を有することも必要であろう。今後において、そのような支援スキルを有する支援者育成の方法についての検討が行われることが期待される。

- 1) ろう重複児・者支援を専門とする事業所・施設などは、利用者であるろう重複児・者を「なかま」と呼ぶことが多い。そのため、本稿では、ろう重複児・者が集う企画を「なかま企画」とする。
- 2) 2007年に特別支援教育制度が施行され、盲学校、聾学校、養護学校は特別支援学校に一本化されたが、ろう重複児・者の家族へのインタビュー調査などにおいては、対象者は知的障害児や肢体不自由児などが通う学校として「養護学校」を多用していたため、本稿では「養護学校」という用語を用いる。

付記

厚生労働省平成30年度障害者福祉総合推進事業「聴覚障害と他の障害を併せ持つためにコミュニケーションに困難を抱える障害児・者に対する支援の質の向上のための検討」の調査Eの結果の一部を2020年度日本財団助成「学術手話通訳に対応した専門支援者育成」事業として更に分析加筆しました。ご協力いただきました方々に感謝の意を記します。また、なかま企画実施において、群馬大学手話サポーター養成プロジェクトスタッフ(山本綾乃氏、川端伸哉氏、下島恭子氏、能美由希子氏)のサポートをいただきました。

文献

- 相磯友子(2006)第2章 重複障害者に関する既存の調査・研究, 重複障害者の職業リハビリテーション及び就労をめぐる現状と課題に関する研究, 独立行政法人高齢・障害者雇用支援機構障害者職業総合センター, 21-49.
- 赤畑淳(2014)聴覚障害と精神障害をあわせもつ人の支援とコミュニケーション—困難性から理解へ帰結する概念モデルの構築—, ミネルヴァ書房.
- 二神麗子(2019)聾重複障害者の居場所づくりの促進要因の検討—親の会と聴覚障害者団体との関わりに着目して—, 日本社会福祉学会第67回秋季大会.
- 二神麗子(2020)「なかま企画」実施の意義, 2019年度「学術手話通訳に対応した専門支援者の養成」事業シンポジウム報告書, 36-39.
- 廣瀬貴一(1993)レスパイト・サービスの理念—入所施設のショートステイと比較して—, 療育の窓, 第85号(全国心身障害児福祉財団).

- 細野浩一 (1998) ろう重複障害者の社会的、人間的復権をめざす基本課題 手話コミュニケーション研究 (特集 重複障害), 30, 日本手話研究所.
- 石倉陽子 (2003) 施設入所している重複聴覚障害者への心理的援助の試み—出入り自由のグループにおける取り組み—. 明治安田こころの健康財団研究助成論文集, 39, 107-115.
- 岩本操 (2002) 精神障害者へのソーシャルワーク援助過程における自己決定を問直す. 立教社会福祉研究, 22, 19-28.
- 群馬大学 (2019) 厚生労働省平成30年度障害者総合推進事業「聴覚障害と他の障害を併せ持つためにコミュニケーションに困難を抱える障害児・者に対する支援の質の向上のための検討」成果報告書.
- 甲斐更紗・金澤貴之・二神麗子・吉村京子・木村素子 (2021) ろう重複障害児・者のコミュニケーションの実態と課題—家族を対象としたアンケート調査から—. 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編, 70, 175-189.
- 金澤貴之 (2008) 聴覚への制約を中心とした重複障害への教育支援. 発達障害支援システム学研究, 7 (2), 89-96.
- 北山修 (1993) 自分と居場所 (北山修著作集 日本語臨床の深層3). 岩崎学術出版社.
- 村瀬嘉代子 (2005) 聴覚障害者への統合的アプローチ—コミュニケーションの糸口を求めて—. 日本評論社.
- 永瀬正昭 (2000) 障害者のリハビリと福祉. 東北大学出版会.
- 永石晃 (2007) 重複聴覚障害をかかえる児童・青年期の人々とその家族への支援—子どもと家族への教育的・心理的支援の実践と展開—. 日本評論社.
- 中根成寿 (2006) 知的障害者家族の臨床社会学 社会と家族でケアを分有するために. 明石書店.
- 中野聡子 (2003) 2次障害発生予防を意識したろう重複児とのかかわり. 聴覚障害の精神保健 (「第11回聴障者精神保健研究集会」報告集), 11, 60-68.
- 中野敏子 (2008) 地域の生活支援再考—「重度・重複」障害のある人をめぐって. リハビリテーション研究, 135, 2-5.
- 全国ろう重複障害者施設連絡協議会 (2019) 全国ろう重複障害者施設連絡協議会加盟施設一覧. 2019年6月.
<https://tukusi.org/pdf/zenrou2019-4.pdf> (2020年8月25日閲覧).

(かい さらさ・ふたがみ れいこ・よしむら きょうこ・
 きむら もとこ・かなざわ たかゆき)